

蒸し暑い日が続いています

## 熱中症情報が出ています

これを書いているのは七月五日です。台風3号が接近して、少しまとまった雨が降ったものの、やはりあまり足りていないような感じですが。梅雨末期になってから、集中豪雨が頻発するような、そんな天候にならないかと危惧する今日この頃です。

さて、毎日蒸し暑い日が続いていますね。スマートフォンアプリで、気象警戒情報などを通知するようにしているのですが、毎日のように「熱中症情報」が発表されています。

これは環境省が発表している情報で、その日のその時間の気温や湿度などの数値をもとに、「熱中症を発生しやすいかどうか」の指数を算出し、市区町村単位で通知するものです。毎日頻繁に更新され、注意を呼びかけています。

こういう情報をできる限り活用して、まだまだこれから長く続く蒸し暑い時期に、体調を崩さないように気をつけましょう。



## 神社うんちく帖

さて、前回は少しだけ「人類史的なお話」の方へと寄り道してみたのですが、今回からはまた日本の神社のお話へと舞い戻ります。

前回に引き続き、「氏神」と「産土神」の意味の違いについてのお話になります。同じようでもちよつと違う言葉なのです。

### 「氏神」と「産土神」の違い ※その二

前回の「神社うんちく帖」からの続きです。

### ◆共同体の性質によって違っているのです

日本では「血縁」「地縁」とその神については、大まかにいうと次のような構図になります。

「血縁」の結びつきで祀られた「一族の神」が、いわゆる「氏神」と呼ばれます。この多くは「祖先神」で、先祖代々から子孫末代までを守る神です。

「地縁」の結びつきで祀られた「土地の神」が、いわゆる「産土神」と呼ばれ、その人がその土地に生まれる前から死んだあとまでを守る神です。

もともとは、人間を取り巻く自然や環境その

ものを「神」として信仰していたものが、人々の生活の変化や時代によって移り変わり、「氏神」や「産土神」として変化してきました。

どちらも「共同体が祀る神」という点では共通していますが、よくよく見るとこういった違いがあります。

いつ頃から同じ意味に使われるようになったかについては定かではありませんが、日本では中世(平安時代の末頃から室町時代)以降には、すでに「氏子」という呼び方があるようなので、その頃からは区別がなくなっていたようです。

ちなみに「氏子」や「氏子中」、「氏子崇敬者」などの言葉がありますが、ちよつとだけ解説を。

「氏子」とは、その氏神を祀る土地や周辺に住み、その祭祀に参加する人たち全体を指します。

「氏子中」とは、同じ氏神を祀る人たち全体を指します。

「氏子崇敬者」とは、氏神を祀る地には住んでいなくても、その神を信仰する人たちを指します。